

「幼き日の思い出」

山上 照美 （81歳）

私は、昭和14年8月に広島県の安浦町という、海や山の自然に恵まれた農家の6人兄弟の末っ子として生まれました。2才のころに戦争が始まりましたが、まわりは山々と田畑に囲まれた所で、終戦を迎える年まで、いわゆる空襲などはありませんでした。それでも敵が攻めてきてはいけない、見つかってはいけないと、家の土壁に墨を塗り、真っ黒にしていました。今でもはっきりと覚えているのは、小学校にあがる前には、米軍の飛行機が飛んできたかと思うと空からアルミの切端のようなものが無数に降ってきて、それを近所の子たちと一生懸命拾ったことです。無数にキラキラと降ってくるそれは、まるで雪か星が降ってきたかのようで仲間と共に我先にと追いかけました。拾い集めて役場に持って行くといえそうほめてもらえました。それは、米軍による電波妨害のためのものだったようですが、子どもながらに自分たちもお国のためにひと役をかつているのだと士気高揚したものです。

また、戦闘機の燃料代わりになると聞けば、松の木を傷つけて松ヤニを集めたりと、戦火こそまぬがれていましたが、“進め一億火の玉だ”の勢いで、野山の中でも、自分たちでできることは当時たった6才の子どもでも、日常の一部でありました。余談になりますが、同じ時期に、後に伴侶となります妻は、大阪府吹

田市で連日、空襲警報が響く中、飛行機が去るまで、暗く狭い防空壕に逃げ込んでいたこと、足にゲートルを巻いた兵隊さん(?)が、防空壕をたくさん掘っていたことを、3才ながらに、よく目に焼きついて覚えているそうです。同じ昭和20年という年に経験は違えど、まだまだ大人から守られている幼い子どもでしたが、戦争という出来事に翻弄されていたように思います。そしてその年の8月6日、よく晴れた暑い日の朝、家の表にいた私は、何かが光ったと思って空を見上げた途端、山の向こうから、見たこともないようなキノコの形をした雲が天高く立ち登る様を見ました。約40km離れた広島市に落とされた原子爆弾でした。